

2. 仙台市内出土の埴輪

今回報告分も合わせて、仙台市内でこれまでに埴輪が出土しているのは計22遺跡ある。これは東北地方の中では、最も分布密度の高い地域となっている。ここではこれまでに知られている資料を紹介し、その特徴について若干の指摘を行うとともに、仙台市域の埴輪の全体的な様相への見通しを述べておきたい。なお掲載した図は、岩切小学校東側地点と屋敷末遺跡以外は全て報告書からの引用である。

[1. 新田遺跡、県登録番号18012]

多賀城市新田及び西後に所在する。行政区画では多賀城市内であるが、次に述べる岩切小学校東側地点に近いためとりあげる。七北田川左岸の自然堤防上に立地し、1964年の小笠原好彦氏らの調査では南小泉式期の住居跡が発見されている（小笠原好彦他：1968・10）。円筒埴輪が出土していると伝えられるが、詳細は不明で、出土地点も特定できていない。

[2. 岩切小学校東側地点] （第35図）

岩切小学校が所蔵している円筒埴輪である。仙台市文化財分布地図では、岩切地区で埴輪を出土しているのは岩切畠中遺跡のみとなっているが、この埴輪を指しているとすると出土地は対応しない。この埴輪は裏町古墳の報告書で、伝聞として岩切中校庭遺跡から埴輪が出土していると紹介されたものにあたると思われる（伊東信雄他：1974・3）。また仙台市教育委員会の行った鴻ノ巣遺跡の報告に際してこの埴輪の概要が紹介されているが、そこでは岩切小学校校庭より出土したと言われているとしている（青沼一民・長島栄一：1982・12）。今回の資料化に際する聞きとりでは、岩切小学校の東側に隣接する永野昌一氏所有の畠から出土したものであることが判明した。この地点は七北田川右岸の自然堤防に立地する。

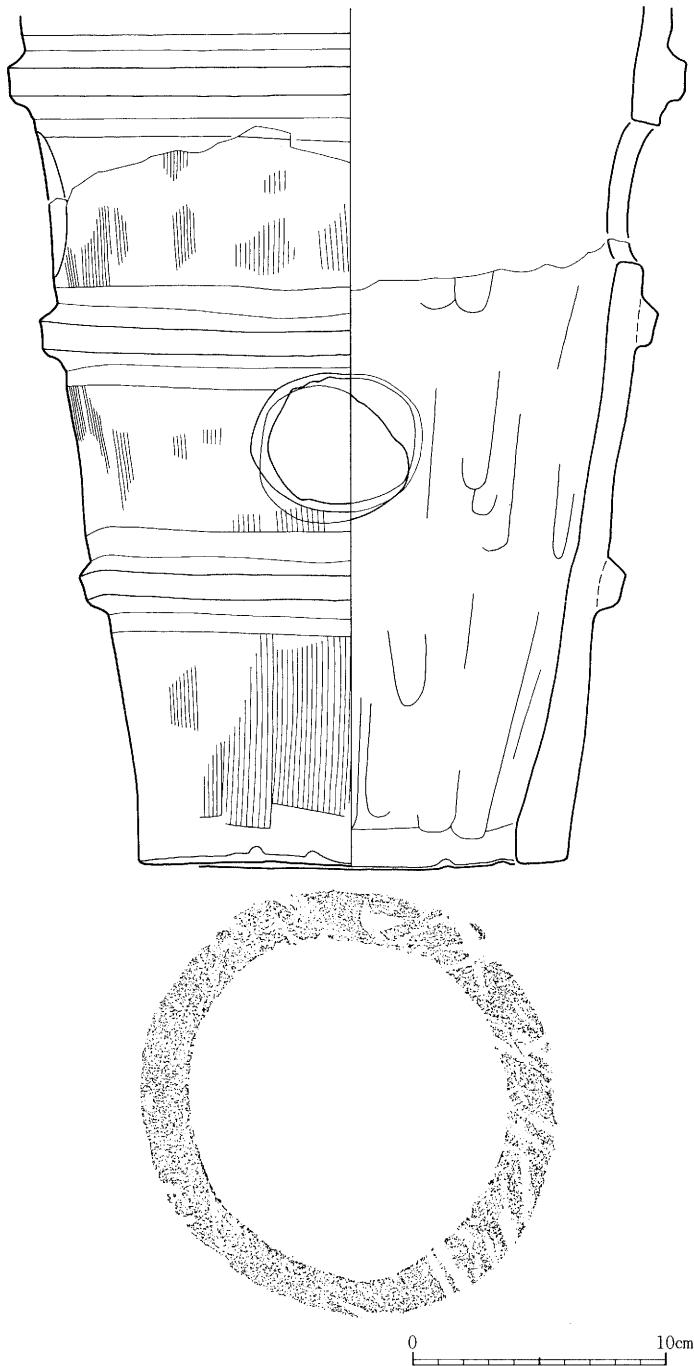
埴輪は口縁部を欠くが、凸帯数3本以上で、第2段と第3段で直交する位置に円形のスカシ孔を一対ずつ穿つ。各段の幅は、第1段11cm、第2段10cmで第3段も10cm程になると思われ、第1段の幅がわずかに大きい以外はほぼ等しい。内外面とも風化が著しいが、外面調整は1次調整タテハケのみ、内面は底部付近を横方向にナデた後、縦方向のナデを行う。但し、この内面調整の前後関係は必ずしも明確でなく、一ヶ所だけではあるが、逆に縦方向のナデを横方向のナデが切っているように観察される所があり、そうであるとすれば底部調整である可能性がある。凸帯は、やや幅の広い台形である。スカシ孔は幅6.0cm～7.2cm・高5.5～6.0cmの円形で、第2段のものを見ると、段の中でも上方に片寄っている。黒斑は認められず、窯窓による焼成と考えられる。内面調整、スカシ孔の穿孔位置などは富沢窯跡系列のものに類似するが



第34図 仙台市内埴輪出土遺跡分布図 (国土地理院 1 / 50,000「仙台」を使用)

No.	遺跡名	所在地	種別	古墳の概要	埴輪	伴出遺物	文献
1	新田遺跡	多賀城市新田他	散布地				
2	岩切小学校東側地点	仙台市岩切	散布地		円筒		
3	案内古墳	仙台市東仙台六丁目	円墳又は前方後円墳	円丘部径10m	円筒		
4	屋敷末遺跡	仙台市下飯田字星敷東	散布地		円筒		
5	岩切城跡内古墳(未命名)	仙台市古城二丁目	円墳	周溝内縁径22m	円筒		佐藤甲二(1986.3)
6	兜塚古墳	仙台市根岸町	帆立貝形?	円丘部径50m、高約5.5m	円筒	須恵器	千葉・阿部(1978.3)
7	二塚古墳	仙台市鹿野二丁目	前方後円墳	主軸長約30m、後円部高約4m、削抜石棺	円筒		伊東信雄(1950.8) 伊東信雄他(1974.3)
8	砂押古墳	仙台市砂押町18	円墳又は前方後円墳	周溝内縁径42m 高約4m	円筒・朝顔		佐藤隆(1983.3)
9	裏町古墳	仙台市西多賀一丁目	前方後円墳	主軸長約50m、後円部高約6m、河原石積竪穴式石室	円筒・朝顔 鉄鏡・乳文鏡	須恵器・土師器・刀子	伊東信雄他(1974.3)
10	原東遺跡	仙台市西多賀一丁目	散布地		円筒		宮城教育大学考古学研究会(1973.2)
11	原(西台)遺跡	仙台市西多賀三丁目	散布地		円筒		宮城教育大学考古学研究会(1973.2)
12	富沢(木戸口)窯跡	仙台市三神峯一丁目	窯跡		円筒・朝顔 形象	土師器・石製模造品	渡辺泰伸他(1974.9)
13	堀ノ内遺跡	仙台市富沢三丁目	散布地		円筒		宮城教育大学考古学研究会(1973.2)
14	教塚古墳	仙台市泉崎一丁目	円墳	径約17m	円筒・朝顔		渡辺誠(1986.3)
15	袋東遺跡	仙台市長町南三丁目	散布地				
16	五反田古墳	仙台市大野田字五反田	円墳	径約20m	円筒		田中則和他(1981.12)
17	伊古田(宿在家)遺跡	仙台市大野田字塚田	散布地		円筒		宮城教育大学考古学研究会(1973.2)
18	大野田1号墳	仙台市大野田字宮	円墳	径約20m	円筒・朝顔	須恵器	長島栄一(1982.3)
19	大野田2号墳	仙台市大野田字宮	円墳	径約20m	円筒・朝顔		長島栄一(1982.3)
20	春日社古墳	仙台市大野田字宮	円墳	周溝内縁径31m	円筒・朝顔 形象		
21	大野田4号墳	仙台市大野田字宮	円墳	周溝内縁径31m	円筒		
22	鳥居塚古墳	仙台市大野田字宮	円墳	周溝内縁径22m	円筒・朝顔 形象		
23	長町清水(皿屋敷)遺跡	仙台市大野田字清水	散布地		円筒		宮城教育大学考古学研究会(1973.2)

第6表 仙台市内埴輪出土遺跡地名表



番号	種類	法量(cm)	凸 带			ハケメ(1/cm)		色 調
			上幅	下幅	高	外面	内面	
-	円筒埴輪	底 径 16.4~17.1	1.1 1.0	2.3 2.3	0.7 0.8	5	-	7.5YR 1/2 浅黄橙
調 整								
外面: タテハケ→凸帶貼り付け→スカシ孔穿孔						写真図版 番 号		
内面: 底部付近横方向ナデ→縦方向ナデ						33-15		

第35図 岩切小学校所蔵埴輪

凸帯形状が異質であり、一応別系列のものの可能性を考えておきたい。

本地点の周辺には南南西1.2 kmの所に千人塚古墳があり本地点も削平された古墳である可能性が高い。

[3. 案内古墳]

仙台市遺跡番号 C-044]

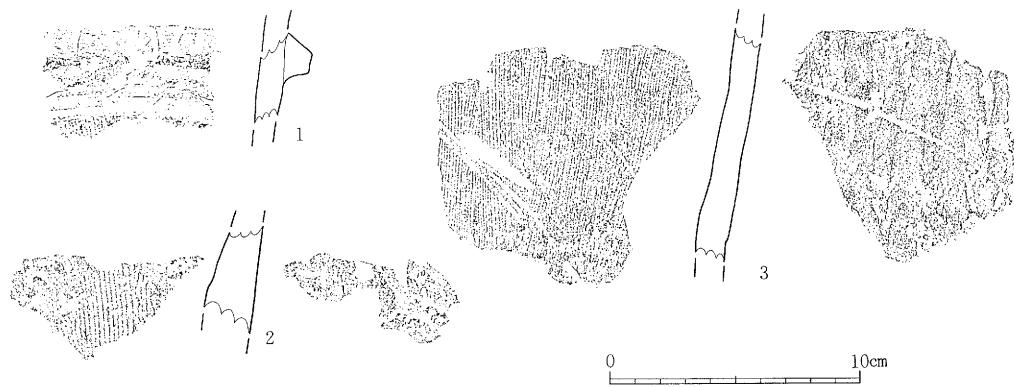
東仙台六丁目の丘陵上に立地する古墳で、円墳又は前方後円墳と考えられる。墳丘は変形が著しいが、円丘部の径は10mを計る。円筒埴輪片が採集されている。この古墳の直下の南側斜面にはO N 46型式の段階の須恵器窯である大蓮寺窯跡がある（渡辺泰伸他：1975）。

[4. 屋敷末遺跡]

C-241] (第36図)

下飯田字屋敷東に所在し、本遺跡の北西約400mには弥生時代の遺跡として著名な藤田新田遺跡がある。浜堤上に立地し、現在は周囲の田よりもわずかに高い畠となっておりこの畠のほぼ全面から埴輪片が採集できる。

第36図に示したのは、比較的特徴の良く判るもので、2は底部近くの破片と思われる。



番号	種類	凸帯(cm)			ハケメ(/cm)		色調	調整	写真図版番号
		上幅	下幅	高	外面	内面			
1	円筒埴輪	0.7	2.1	1.0	約5	—	5 Y R % にぶい橙	外面：タテハケ→凸帯貼り付け 内面：不明	—
2	円筒埴輪	—	—	—	8	—	5 Y R % 橙	外面：タテハケ 内面：縦方向ナデ	—
3	円筒埴輪	—	—	—	5	—	5 Y R % 橙	外面：タテハケ 内面：ナデ	—

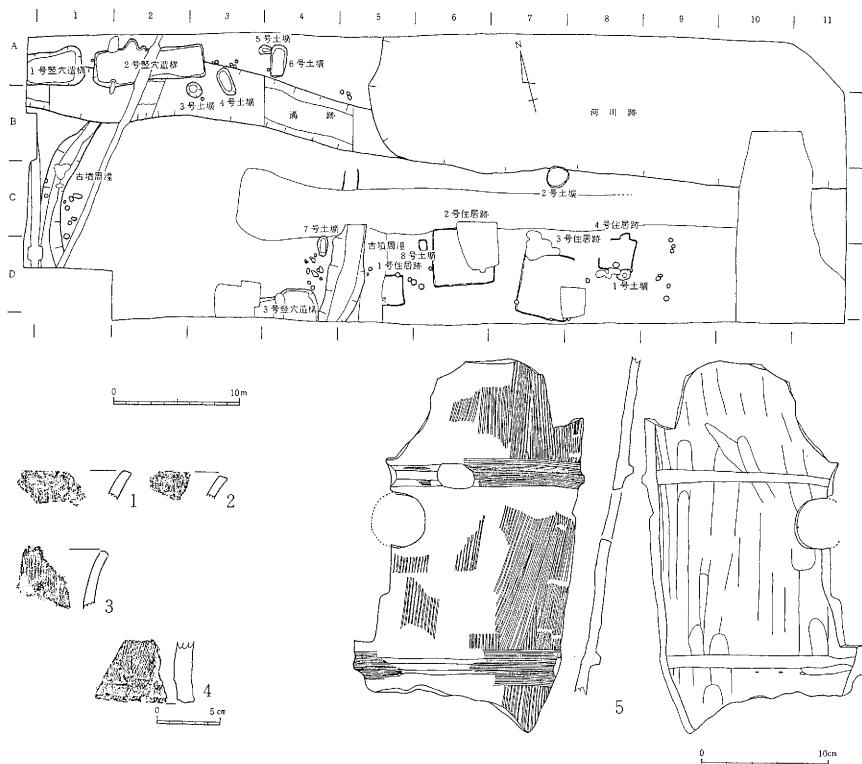
第36図 屋敷未遺跡出土遺物

採集された埴輪は、いずれも円筒埴輪片で、朝顔形埴輪、形象埴輪は確認されていない。いずれの破片も外面は1次調整タテハケのみで、内面調整は縦方向のナデであり、黒斑はない。内面調整や凸帯は富沢窯跡系列のものに類似し、特に3の内面調整の状態は、富沢窯跡の系統のものに酷似する。しかし資料的に限界があるため断定は避け、その可能性を指摘するに留めておきたい。

本遺跡の南約300mの所には下飯田薬師堂古墳があり、本遺跡も削平を受けた古墳である可能性が高い。

[5. 若林城跡内古墳 C-511] (第37図)

若林城跡は古城二丁目に所在し、寛永5年(1628年)に伊達政宗の隠居所として築かれた居館で、現在は宮城刑務所となっている。本遺跡の北約500mには猫塚古墳、北約800mには横穴式石室をもつ法領塚古墳、東約1.1kmには遠見塚古墳がある。1985年に職業訓練棟建設の際に仙台市教育委員会が発掘調査を行い、平安時代の集落跡と古墳周溝を検出している(佐藤甲二:1986・3)。墳丘はもとより周溝上部まで削平を受けており、周溝底面付近が部分的に残存していた。円墳と考えられ、周溝内縁での径は22mを計る。周溝は溝跡と3号竪穴遺構に切られており、溝跡はさらに1・2号竪穴遺構に切られている。1~3号竪穴遺構の堆積土上部には、いずれにも10世紀前半に降下したと考えられる灰白色火山灰が含まれている。溝跡・3号竪穴遺構とともに周溝より内側へかなり入り込んでおり、平安時代にはすでに墳丘はほとんど



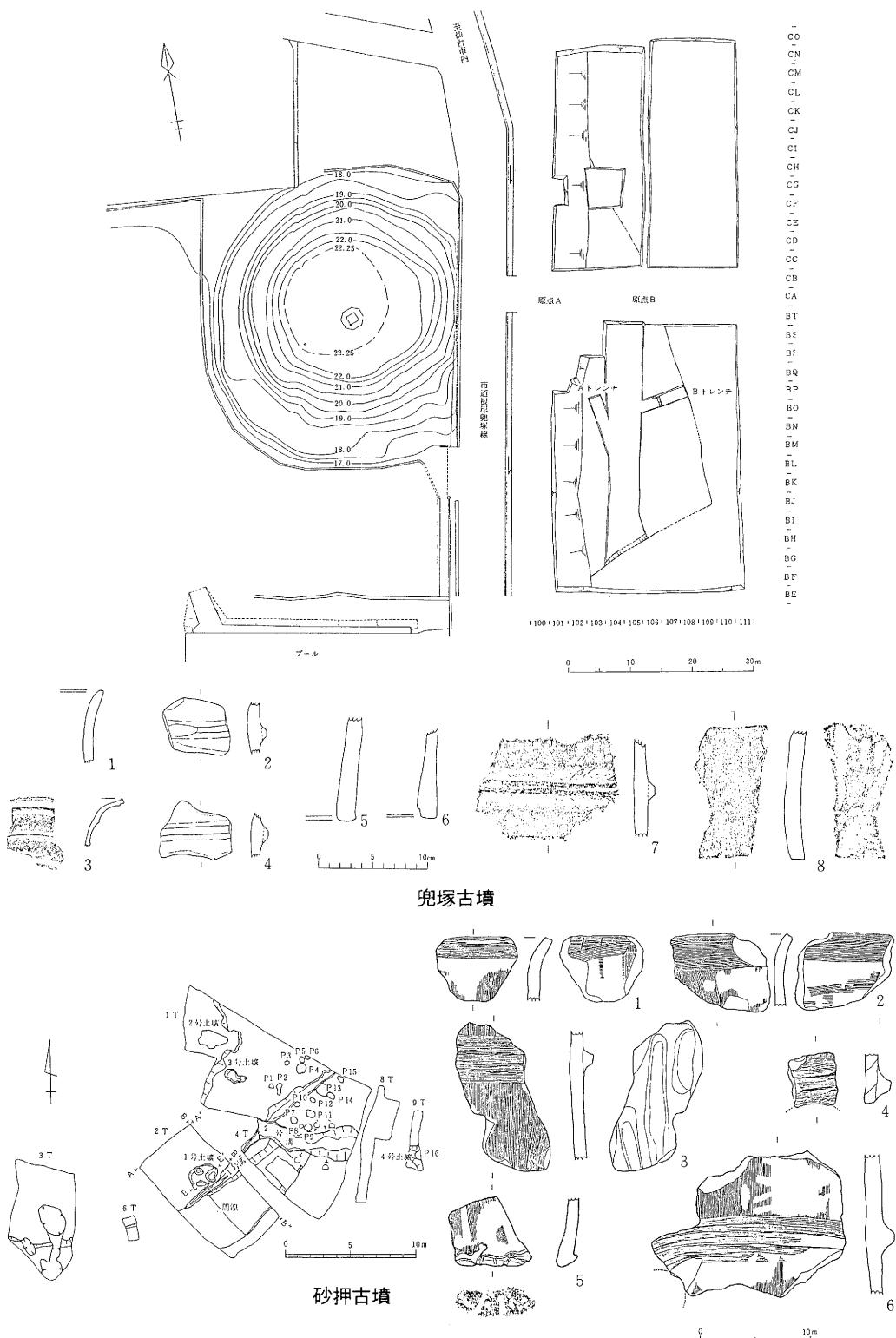
第37図 若林城跡内古墳平面図・出土遺物

削平されていたものと考えられる。

埴輪は周溝内と周溝周辺より出土しており、全て円筒埴輪である。全体の特徴を知りうるものはないが、富沢窯跡系列2段階としたものに各部の特徴が一致する。

[6. 兜塚古墳 C-002] (第38図)

根岸町13に所在し、長町一利府線に近い沖積平野に立地する。径50m、高さ約5.5mの円丘状のマウンドが残存している。1977年に宮城県教育委員会によって市道根岸兜塚線の東側の地区の範囲確認調査が行われている。(千葉宗久・阿部博志:1978・3)。周溝の平面形が調査区南東で外縁が直角に近く屈曲することより、帆立貝形となる可能性が強い。深さは約40cmである。埴輪には円筒埴輪があり、破片のみで、いずれも表面の風化が激しいため全体の特徴を知りうるものはないが、口縁部形状・凸帶形状・内面調整は富沢窯跡系列のものに合致する。但し7は富沢窯跡系統1段階としたものに類似するが、2・4は2段階のものに類似する。いずれも表面の風化が激しいため決め難いが、1段階の中でも2段階に近い時期と考えておきたい。^{註12)}他に須恵器が2点発見されており、そのうち1点が報告されている。焼けひずみがあるため口径等は復元し難いが、中型甕の口縁部と思われる。口頸の中ほどに凸線があり、それをは



第38図 兜塚古墳・砂押古墳平面図・出土遺物

さんで2段に波状文が施されている。口縁端部や凸線のつくり出しは鋭く、陶邑編年のⅠ期（Ⅰ型式）の範囲に入る可能性が高いと思われるが、出土状況が周溝東測での表採であるため古墳に伴うものか否かは不明である。

註13)

[7. 二塚古墳 C-024]

鹿野二丁目（旧長町鹿野前69）にあった西向きの前方後円墳で、1949年に削平されてしまった。この古墳については、高野松二郎（1907・12）、布施千造（1907・12）、笠井新也（1918・2）、松本彦七郎（1930・6）の諸氏の報告があるが、その内容は必ずしも一致しない。それらを検討した伊東信雄氏の報告（伊東：1950・8、伊東他：1974・3）にもとづいて、その概略を紹介しておきたい。規模は主軸長約30m、後円部径・前方部長ともに15m、高さ後円部4m、前方部2.5m程であり、1905～06年頃に後円部から凝灰岩の割抜石棺の身のみが出土している。石棺は長さ約2.6m・幅約1m・高さ約70cm・穴の深さ約30cmで、上縁が印籠造りにつくられているが、蓋は発見されていない。墳丘上で円筒埴輪の破片がひろえたことは伊東氏の報告に明らかである。埴輪の内容は不明である。

[8. 砂押古墳 C-007] (第38図)

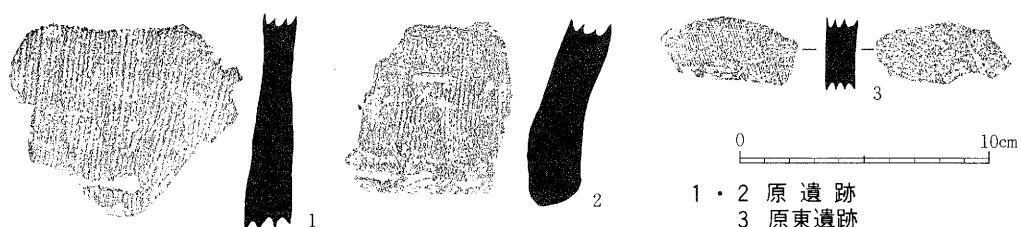
砂押町18に所在し、台の原段丘が長町一利府線に切られる付近の斜面に立地し、径約20m・高さ約4mのマウンドが現存している。円墳あるいは前方後円墳と考えられ、1982年に墳丘南側が仙台市教育委員会によって調査されている（佐藤隆：1983・3）。それによると周溝内縁径約42m、墳丘径約29mで、周溝は上端幅3.3～4.3m、下端幅2.3～3.9m、深さ30～40cmである。埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪があり、形象埴輪は認められていない。全体の特徴を知りうるものはないが、凸帯形状、内面調整、スカシ孔の特徴など、富沢窯跡系統のものに合致する。凸帯形状は富沢窯跡系統1段階のものに類似するが、スカシ孔の径は2段階のものに近い。いずれも破片のため決定し難いが、1段階の中でも後出的なものと考えておきたい。

[9. 裏町古墳 C-008]

第Ⅷ章1で詳述。

[10. 原東遺跡 C-155] (第39図)

西多賀一丁目に所在し、中町段丘が長町一利府線に切られる縁辺付近に立地する。宮城教育大学考古学研究会による名取川水系遺跡分布調査の際に、円筒埴輪片が1点採集されている



第39図 原遺跡・原東遺跡出土遺物

(宮城教育大学考古学研究会：1973.2)。報告されているものは外面調整はタテハケである。

[11. 原遺跡 C-154] (第39図)

西多賀一丁目に所在し、宮城教育大学考古学研究会による名取川水系遺跡分布調査の際に円筒埴輪片が6点採集されている(宮城教育大学考古学研究会：1973.2)。報告されたものは2点で、1は底部近く、2は底部の破片である。いずれも外面調整はタテハケである。

この原遺跡と原東遺跡は裏町古墳の西方にあたり、浜田廉氏の「名取鎮所址」に掲載されている西多賀地方の古墳分布略図には、この付近に古墳があったことが示されている(第40図)。この図中の東端に示されている古墳が裏町古墳に該当すると考えられ、原東遺跡が東から2番目の古墳に、原遺跡が3番目の古墳に、東西の位置関係ではおおよそ該当する。しかし古墳分布略図では、この2古墳はいずれももとの秋保電鉄の南側にあるが、現在の原・原東遺跡は、この秋保電鉄線にほぼ重なる国道286号線より北側の場所が登録されている。したがって、古墳分布略図におけるこの2古墳の位置と原・原東遺跡の位置は厳密には該当しない。

[12. 富沢窯跡(木戸口窯跡)、C-417]

第Ⅷ章1で詳述。

[13. 堀ノ内遺跡 C-153]

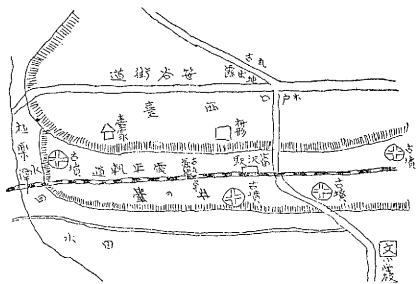
富沢三丁目の自然堤防上に立地する。宮城教育大学考古学研究会による名取川水系分布調査の際に埴輪片1点が採集されている(宮城教育大学考古学研究会：1973.2)。

[14. 教塚古墳 C-014] (第41図)

泉崎一丁目にあった古墳で、1985年に古墳を含めた範囲に盛土が行われた際に仙台市教育委員会が遺構範囲確認のための発掘調査を行い(渡辺誠：1986.3)、翌1986年に宅地造成に伴い埋蔵文化財調査研究所が発掘調査を行い壊滅した。

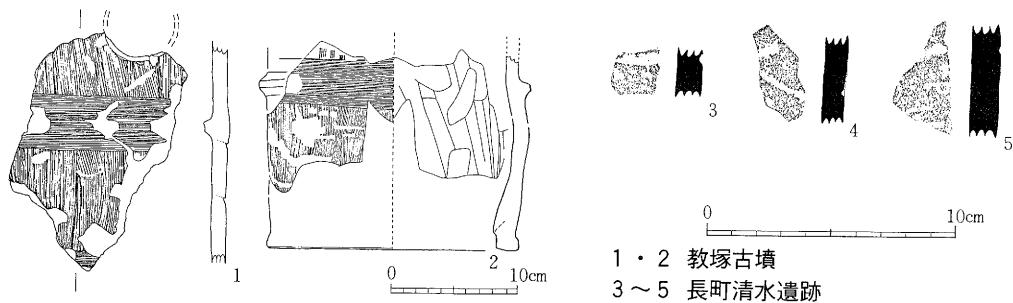
古墳は削平が著しかったが、径15m程の円墳と思われ、後背湿地の黒褐色粘土層上に堆積した黄褐色のシルト質砂層の自然堤防状の高まりを利用して築かれている。墳丘はほとんど削平され、主体部も発見されていない。

出土埴輪は仙台市教育委員会による調査では、円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土しており、形象埴輪は発見されていない。報告されている埴輪は中間段の破片と第一凸帯付近の破片で、全体の特徴を知りうるものはないが、いずれも富沢窯跡系統2段階のものに各部の特徴が類似する。



第40図 三神峯周辺古墳分布略図

(浜田廉「名取鎮所址」より)



第41図 教塚古墳・長町清水遺跡出土遺物

但し、第41図1は残存部の下端近くにヨコナデが一部観察され、これが凸帯貼り付けに伴うものであるとすれば、凸帯数が3本になる可能性もある。

[15. 袋東遺跡 C-198]

長町南三丁目他に所在し、笊川北岸の自然堤防上に立地する。埴輪の内容、細かな出土位置は不明である。

[16. 五反田古墳 C-040]

第VII章1で詳述。

[17. 伊古田遺跡（宿在家遺跡）、C-196]

大野田字塚田に所在する。本古墳群の西約300mの自然堤防上に立地する。宮城教育大学考古学研究会による名取川水系遺跡分布調査の際に埴輪片1点（凸帯部）が採集されている（宮城教育大学考古学研究会：1973・2）。1983年と1984年に仙台市高速鉄道建設に伴い、遺跡範囲の西端に近い地区が仙台市教育委員会より発掘調査が行われているが、この調査の際には古墳に関する遺構や埴輪は発見されていない（高橋勝也：1984.3：1985.3）。しかし名取川水系遺跡分布調査では「中新笊川の西隣に位置する」となっている。「中新笊川」とは「新笊川」の誤りと思われ、この報告では新笊川の右岸であることは明らかであるが、現在の仙台市文化財分布地図では、新笊川の左岸のみの範囲が遺跡として登録されているため、本来の地点は現在の遺跡登録範囲とは対応しない。

[18. 大野田1号墳・19、大野田2号墳、C-054]

第VII章1で詳述。

[20. 春日社古墳・21、大野田4号墳・22、鳥居塚古墳]

第III・V・VI章で詳述。

[23. 長町清水遺跡（四屋敷遺跡） C-185] (第41図)

大野田字清水に所在する。本古墳群の東約200mの自然堤防上に立地する。宮城教育大学考古学研究会による名取川水系遺跡分布調査の際に、埴輪片16点が採集されている（宮城教育大

学考古学研究会：1973・2）。報告されている3点は、ヘラ描きを有するものである。

[小結]

これらの23遺跡のうち、富沢窯跡系列に属す埴輪が11遺跡（古墳10・窯跡1）から出土している。特に郡山低地とその周辺では、五反田古墳を除き、特徴の知られている埴輪は全て富沢窯跡系列のものとなっている。この五反田古墳出土埴輪も、五反田古墳系列としたものが裏町古墳で富沢窯跡系列とした埴輪と伴っている。これらの古墳は、前方後円墳で主軸長が50mを越えるもの（裏町古墳・兜塚古墳・砂押古墳？）と、径20m前後の円墳とに分けられ、この両者はその被葬者の階層が異っていたと考えるべきであろう。富沢窯跡系列・五反田古墳系列の埴輪の分布範囲がどこまで広がるかは充分明らかにはしていかないが、この両系統の工人集団は、上記の前方後円墳の被葬者、あるいはそれらを統合するより上位の首長のもとで、これらより下位の階層にも埴輪を供給していたという生産の様相が想定しうるであろう。

今回報告分も合わせて、富沢窯跡系列・五反田古墳系列の埴輪は、ともに全て同様の胎土からなっている。すなわち、肉眼で確認できる砂粒が、ほとんど石英・長石の両者で、他の鉱物は極めて少なく、かつ長さ1mm程の動物珪酸体（宇津川徹・上条朝宏：1980・10：1980・12）^{註14)}を少量含んでいる。また含まれる石英・長石も1～3mm程の大きさのものがほとんどで、しかも砂粒の角がとれて丸くなっている。このような胎土は、郡山低地の各時代の土器に普遍的に見られるものであり（佐藤洋：1981・3）、このことをもって限定することはできないが、これらの埴輪が富沢窯跡や、あるいは当地域の別の地点で製作された可能性は高いものと思われる。

ここであげた仙台市内の埴輪出土遺跡のうち、沖積平野に立地する中小規模の古墳は、そのほとんどが削平されており、墳丘が残存していたのは教塚古墳・春日社古墳、および鳥居塚古墳のごく一部にすぎない。若林城跡内古墳にいたっては、他の遺構との切り合い関係より、平安時代には墳丘のほとんどがすでに削平されていたと考えられる。このような状況より、削平された古墳の数は、さらに多いことが予想され、今後の調査の進展によって、埴輪を有する古墳の数も増大するであろう。特に、若林城跡内古墳や教塚古墳のように、現在では1基のみしか知られていない中小規模の古墳の場合、大野田古墳群のように、その周間に削平され埋没した古墳が存在する可能性は高いと考えるべきであろう。